



## 活版印刷の発明

世界の三大発明といえば、火薬・羅針盤・活版印刷です。もともとは中国で発明されましたが、これらがルネサンス期のヨーロッパに大きな社会変革を起こしました。火薬による強い軍事力を得て、世界の覇権をヨーロッパが握るようになりました。羅針盤の改良により航海技術が発達し、大航海時代が始まりました。そして、活版印刷は、人々の知識欲を満たし情報を広めることで、近世社会の到来に大きく貢献しました。



国立国会図書館デジタルコレクション

印刷技術が中国でいつ生まれたかは、はっきりしません。現在残されている世界で一番古い印刷物は、西暦770年(奈良時代)に日本で作られた百万塔陀羅尼という塔のかたちをしたケースに入れられたお経です。ただし、どのように印刷されたのか、版が木製だったのか金属製だったのかもわかっていません。

それでは、活版印刷についてくわしく見ていきます。  
西暦1450年頃、ドイツのヨハネス・グーテンベルクが活版印刷術を改良しました。  
活版印刷とは、1文字ずつの活字を並べて作った版(活版)にインクをつけてスタンプを押すようにする印刷方法です。  
この活字に使う鉛の合金も、低温で溶けて素早く固まる性質で、大量に製造できました。(1人の職人が1日に600個作ることができました)  
さらに油性インクが発明され、金属の活字がきれいに印刷されるようになりました。  
印刷機は、ワインを作るときに使うぶどう絞り機を改良し、1日に300ページ印刷することができました。



それまでヨーロッパでは、本は1文字1文字、人の手で書かれていました。本は大変貴重で、字を読み書き出来る人も僧侶(修道士)ぐらいしかいませんでした。本を作るのも保存するのも修道院でした。しかし、活版印刷技術により、一度にたくさんの本が作られるようになり、読み書きができる人が増え、本の種類も増えました。

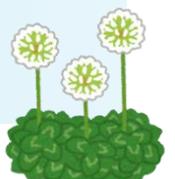
本により情報が広がり、情報が世界を変えていきました。

そして今は、SNSなどで誰もが情報を発信できるようになりました。あなたの情報が世界を変えるかもしれませんね。

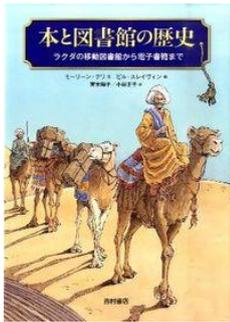


参考図書 『本と図書館の歴史』 モーリーン・サワ：文 ビル・スレイヴィン：絵 宮木陽子・小谷正子：訳 西村書店 2010年  
『本のれきし5000年』 辻村益郎：作 福音館書店 1992年  
『本について授業をはじめます』 永江朗：著 少年写真新聞社 2014年

裏面には、関連図書の紹介やコラムを掲載しています。タブレット・スマホからは[こちら](#)



## 『本と図書館の歴史』



モーリーン・サワ：文、ビル・スレイヴィン：絵、宮木 陽子：訳、小谷 正子：訳  
発行：西村書店 2010年

粘土板の本から電子書籍まで、紀元前の図書館の誕生から現代の電子図書館までの歴史について、絵本形式で分かりやすく紹介されています。

コンパクトでありながら、かなり細かいエピソードも語られています。  
この本を読むと、自由に本が読めることは特別なことだとわかります。



## 『本ができるまで』



岩波書店編集部：編  
発行：岩波書店 2003年

グーテンベルクが改良した活版印刷術から現代の印刷術まで、印刷技術の進化の歴史が語られています。

活字に適した書体を生み出したり、図を美しく印刷する方法を開発したりと、本を作る人々の研究と努力が書かれています。



しゃほん

## 写本ってなに？

西暦400年～1000年ごろをヨーロッパの「暗黒時代」といいます。

ローマ帝国が崩壊した後、政治的な混乱や文化的な退行がありました。

それまであった図書館を維持する資金もなければ、利用する人もいなくなりました。

こうして図書館は崩壊していきました。

かわりに、当時ヨーロッパ中にあらわれはじめた教会や修道院が、自分たちの図書館をつくりはじめました。

この図書館に備えた本は、修道士たちが書き写した本でした。

修道士たちは、うす暗くて（明るいと貴重な書物が傷むので）じめじめした部屋で、1日に6～7時間も働いていました。

『薔薇の名前』という本やそれをもとにした映画に、当時の修道士たちの様子が描かれています。

## 『薔薇の名前 上・下』



ウンベルト・エーコ：著、河島 英昭：訳  
発行：東京創元社 1990年

迷宮構造をもつ文書館を備えた中世北イタリアの僧院で、「ヨハネの黙示録」に従った連続殺人事件が。バスカヴィルのウィリアム修道士は、事件の陰に一冊の書物の存在があることを探り出したが…。

